



教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可済
©1987
発行所
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

イエズス・キリスト 救い主、王 キリストシリーズ⑤

1 前回すで見たとように、マテオ福音書の冒頭に記されたマリアの子イエズスの系図は、「キリストと呼ばれるイエズス」(マテオ16)という表現で結ばれています。ギリシャ語の「キリスト」はヘブライ語の「メシア」の同義語で、「油を注がれたもの」を意味する語です。神に選ばれた民イスラエルは、幾世代にもわたってメシアの約束が成就することを切望し続けてきました。メシア到来は契約の歴史をおして準備されていきました。神より遣わされた油を注がれたもの、すなわちメシアが来られ、契約の民への招きを完成させることになっていたので、この民には、神とその救いの御計画についての真理を、啓示によって知る特権が与えられていました。

2 ナザレトのイエズスに「キリスト」の名が情せられたのは、契約の神の御計画とイスラエルの民の切望がイエズスのうちに実現したことを、使徒たちと初代教会が理解した証です。これはまた、聖霊降臨の日にペトロが宣言した事柄でもあります。ペトロは聖霊に導かれて、エルサレムに住む人々や祭りに集まってきた巡礼者に、初めて次のように語りました。「イスラエルのすべての人は、あなたがたが十字架につけたそのイエズスを、神が主としキリストとされたことを、しかと知らねばなりません。(使徒行録2・36)

油を注がれたもの

3 ペトロの語ったこの言葉と、マテオの記す系図は、旧約聖書に記された「メシアーキリスト」という語が、実にゆたかな内容をもつものであることを示しています。

次にこれについて考えてみましょう。注油するという意味を含む語「メシア」はもちろん油を注ぐことに関するのみ理解することができません。それは周知のように、イスラエルにおいて広く行なわれ、旧約から新約へと伝えられてきたことです。旧約の歴史においては、王と司祭と預言者の任務や位に、神によって召された人々が油を注がれていました。旧約の時代にこの三つの「職務」は、神の民を導き、その代表となるべき人々に授けられるものでした。こういう聖書の背景を踏まえてキリストメシアについての真理を理解しなければなりません。いまここでは、王であるキリストの職と尊厳について考えてみましょう。

4 大天使ガブリエルが、あなたに救い主の母になる召命を受けたと処女マリアに告げたとき、その御子の王権について語りました。「……その子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられ、永遠にヤコブの家を治め、その国は終わることがない。(ルカ1・32-33)」

大天使ガブリエルのこの言葉は、王ダビドになされた約束と符合するものです。「ときがくれば……私はおまえの子孫に跡をつがせ国のもとを固めさせよう。その子孫は私の名のために家を建て、私は彼の王座を(永久に固いもの)にしよう。私はその者の父となり、そのものは私の子となる。(サムエル下7・12-14) この約束はある意味で、ダビドの息子であり王位継承者でもあるソロモンにおいて成就したと言えるのですが、その約束が真に意味するものは、地上の王国の境をはるかに越えたものであり、遠い未来にとどまらず、歴史、時、空間を超越したものです。「私は彼の王座を永久に固いものにして。(サムエル下7・13)」

5 マリアへのお告げの中でイエズスは、そのうちにおいて古来の約束が実現する御方として現われます。このように、王としてのキリストの真理は「メシア・王」という表現で聖書が記す伝承のうちに見出すことができます。ナザレトのイエズスの使命を語りその教えを伝える福音書には、「メシア・王」という表現のもとに王であるキリストの真理が多く記されています。

この点を考えれば、イエズス御自身の対応の仕方には実に多くの意味が含まれているのがわかります。例えば、盲人でこじきのバルティメオが「ダビドの子イエズス、私をあわれんでください。(マルコ10・47)」と助けを求めて叫ぶと、初めてこの呼び名を耳にされたイエズスは、バルティメオが叫んだ呼び名をそのままお受けになりました。必要ならその言葉の意味をはっきりさせようと思われたのでしょう。事実、ファリサイ人の方に向き、「あなたたちはキリストについてどう考えているのか。それはだれの子か」とお尋ねになりました。すると彼らは「ダビドの子です」と答えたので、イエズスは、「そうするとダビドが靈感を受けて、彼を主と呼ぶのはなぜだろう。(主は私の主に仰せられた。『私が敵を足の下におくまで、私の右に坐れ』(詩篇109・1)と書かれている。ダビドは彼を主と呼んでいるのに、なぜ子なのか) (マテオ22・42-45)」とお尋ねになりました。

6 このようにイエズスは、メシアをダビドの王位継承に結びつけ、ただイスラエルの伝承だけをもとに理解しようとする「視野の狭い」不十分な態度を注意させたわけです。しかしその伝承を否定されることなく、すべての意味においてそれを完成なさいました。それはすでに御告げの中で語られたことであり、過ぎ越しにおいてははっきり示されるはずのことだったので、

7 もう一つの重要な事実を見てみましょう。イエズスは、受難の直前にエルサレムにお入りになり、マテオ(21・5)とヨハネ(12・15)が記すように、ザカリヤの預言を成就なさいました。そこでも「メシアー王」と表わされています。「シオンの娘よ、喜び勇め、エルサレムの娘よ、喜びおどれ。見よ、王が来られる、正しいもの、勝利のものが。彼は謙虚なもので、ろばに乗ってこられる。子らば、雌ろばの子に乗って。(ザカリヤ9・9)」「シオンの娘に言

実現

え、(王が来られる。牝ろばと荷を担うけもの子、小ろばに乗るへりくたる人)。(マテオ21・5) 実にイエズスは、熱狂的な歓声「ダビドの子にホザンナ」(マテオ21・1〜10参照)の中を、子ろばに乗ってエルサレムに入城されたのです。そして、ファリザイ人の憤りをよそに、「子どもたち」(マテオ21・16、ルカ19・40)のメシアへの歓呼をお受けになりました。イエズスは、メシアという呼び名のあいまいさが、受難を通して栄光をうけることによって一掃されることを御存じだったのです。

8 王位を地上の権力と考えれば混乱するのですが、聖書のことばがこれを明らかにしています。イエズスのエルサレム入城以後の日を考えば、御告げのときの天使の言葉、つまり「その子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられ、永遠にヤコブの家を治め、その国は終わることがない」という言葉を、どのように理解すべきかがわかります。イエズス御自らその王権の本質、すなわちメシアについての真理とそれを理解する方法をお示しになることでしょう。

9 これを明かす決定的瞬間が、ヨハネ福音書に記されたイエズスとピラトの会話の中にあります。イエズスがローマ総督の前に、「ユダヤ人の王」であると主張したと訴えられたので、ピラトはこの訴えについて尋ねます。ローマにとってこれはすこぶる重大なことでした。なぜなら、もしイエズスが本当に「ユダヤ人の王」と言い、弟子たちもそうと認めているならば、それは帝国を

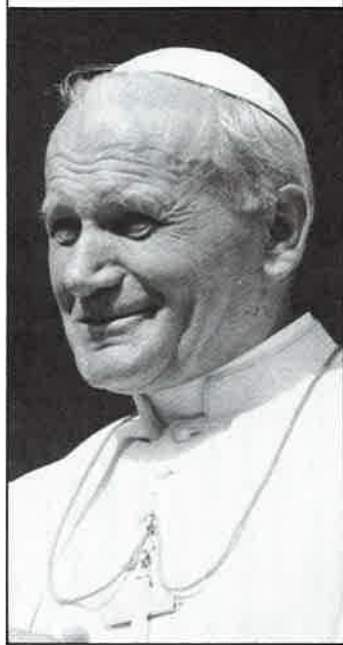
脅かしかねないことであつたから。「あなたはユダヤ人の王か」という問いに、イエズスは「あなたは自分でそう言うのか。あるいは、ほかの人が私のことをそう告げたのか」とお尋ねになり、次いで説明を加えられました。「私の国はこの世のものではない。もし私の国がこの世のものなら、私の兵士たちはユダヤ人に私をわたすまいとして戦つたであろう。だが、私の国はこの世からのものではない」と。つぎにピラトが「するとあなたは王か」と尋ねると、イエズスは「あなたの言うとおり私は王である。私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世にきた。真理につく者は私の声を聞く」とお答えになりました。(ヨハネ18・33〜37) このイエズスのはっきりした

御言葉の中に明白な事実を見出すことができます。つまり、神より遣わされたメシアであるキリストの使命に結びついた王としての本質や任務は、地上の権力を問題にする政治的な意味においても、選ばれた民「イスラエル」との関連においても理解されるものではないということ。当時のユダヤ人の間で広まっていた考え、つまり「メシアー王」を地上の政治的な王とする考えとキリストの「メシアー王」の概念とが一致しなかったことは、イエズスの裁判の結論からも明らかにあります。「王であると主張した」としてイエズスは死の判決を受けられました。十字架の札には「ナザレトのイエズス、ユダヤ人の王」と記されました。ローマ当局にとってはそ

れがイエズスの罪状だったのです。矛盾しているのですが、この地上に「ダビドの王国」を再建することを熱望し続けたそのユダヤ人たちは、むち打たれた茨の冠を被せられ、「これがおまえたちの王だ」というピラトの言葉とともに引き出されたイエズスを見て、「十字架につけよ……私たちの王はチエザルのほかありません」(ヨハネ19・15)と叫んだのでした。ローマ総督の前での取り調べにおいてイエズス御自らはっきりと仰せになったあの答えを考えれば、キリストの十字架につけられた札の意味がさらによくわかります。キリストの答えが示す意味においてのみ、キリスト「メシア」は「王」なのです。そして、この意味においてのみ、旧約聖書に記され契約の民の歴史に刻

まれた「メシアー王」の伝承がイエズスのうちに実現するのです。**11** おしまいに、カルワリオにおける最後の出来事を見てみましょう。これはイエズスが王たる救い主であることを如実に表わすものです。イエズスと共に十字架につけられた罪人の一人が、深く印象的に真理を明示しています。「イエズス、あなたが王位を受けて帰られるとき私を思い出してください」(ルカ23・42)するとイエズスはおおせになりました。「まことに私は言う、今日あなたは私と共に天国にいるであろう」(ルカ23・42) ここで、天使が御告げの中で語つたあの言葉を私たちは確信できるのです。「イエズスは治め、その国は終わることがない」(ルカ1・33)(八七・二・十一)

マリア年の祈り



● マリア年にあたって ●

1 贖い主の御母よ、御身に捧げられたこの年、大きな喜びのうちに御身を幸いな御方とお呼びいたします。

父なる神は、御自身の摂理による救いの計画を実現させるため、世の創造以前より御身をお選びになりま

した。御身は、神の愛を信じ、神の御言葉に従われたのです。

神の御子は人類を救うため人となるにあたり、御身が御自分の母となることをお望みになりました。御身は素早い従順と分かたれ得ない心で主をお受けになったのです。

聖霊は御身を御自分の神秘的な花

嫁として愛され、特別な賜で御身をお満たしになりました。御身は聖霊の目には見えぬが強力な導きに御自らを委ねられました。

2 キリスト教2000年目を目前にして私たちは、御身を認め御身に助けを求め、教会を、御身に委ねます。

御身は、教会の先に立つて信仰の旅路を歩きました。困難や試練に出会う教会を力づけ、教会がつねに神との一致の親密な印となり道具となりますように。

3 キリスト者の母である御身に、福音受容以来600年目あるいは1000年目を迎え、それをマリア年間に祝う国を特にお願いたします。彼らの長い歴史には御身への献身のしるしが深く刻み付けられてあります。

信仰のために苦しんでいる人々に

慈しみ深い眼差しを注ぎ、彼らに力をお与えください。

4 人類家族と諸国の母であるマリアよ、人類全体をその希望と恐れと共に全幅の信頼を込めて御身に委ねます。人類に真の知恵の光が欠けることのないように。

全ての人のために自由と正義を求めるよう人類をお導きください。平和の道への歩みをお示しください。

みな、道であり真理、命であらせられるキリストに出会うことのできますように。

おとめマリアよ、信仰の旅を続ける私たちに力を与え、永遠の救いの恩寵を私たちに手に入れてください。寛容、仁慈、甘美なる神の御母にして私たちの母マリア。

説教・講話・書簡等の抄訳

信徒について

信徒の司祭職、預言職、王職

1 ふたたび、信徒とは、という質問を取り上げましょう。公会議は次のように答えてくれます。

「信徒とは……、洗礼によってキリストに合体され、神の民に加えられ……教会と世界の中で自分の本分に応じてキリストを信する民全体の使命を果たすすべてのキリスト者のことである。」(『教会憲章』31)

洗礼によってキリストに合体される。これこそすべて信じる人の尊厳を示す神秘的事実です。ここにこそ、全く無償で与えられた新しい生命のものが現出されます。キリスト信者は、この生命を発展させその証人となるよう召されているのです。この超自然的な事実は恩寵と自由の力によって人間の全存在を変えようとすることを意味します。聖パウロはこの超自然的現象が人格の根本であることを力強く述べています。「キリストの洗礼を受けたあなたたちはみな、キリストを着たのである。」(ガラツィア3・27)

2 公会議は、すべての信徒を、地の塩、世の光とするこの崇高な現実を深く掘り下げるため、確かな神学の伝統が提供する要素を受け入れて、信者が司祭職、預言職、

王職という三職に参与する点を強調しました。

信徒は自分自身とその活動を捧げることによって主と一致し、十字架において、そして聖体の祭儀において、絶えず自らを捧げるキリストの司祭職に参与します。祈りや善業、日々の仕事や労苦、家庭生活、物心両面の慈善を(『聖』)において行なうなら、キリストを通して神に嘉せられる犠牲となります。信徒は、キリストの司祭職に与るわけですから、「いざこにおいても聖なる行ないをもって神に礼拝をささげるものとして」(『教会憲章』34)世界を神に捧げるよう特に召されています。キリストの預言職への参与によって信徒は、特に「世に福音を告げるための崇高な働き」をするのにふさわしい者となります。すなわち、言葉と模範、使徒職、また多くの場合、人々が知らずに待ち望んでいる希望と知識の(『種蒔き』)をすることによって、貢献するのです。公会議によると、信徒がこの預言職を果たす場合は、おもに結婚生活と家庭生活においてであると強調します。夫婦は互いに婚姻の聖務者であるからです。(『教会憲章』34)

キリストは王であります。それはとりもなおさず、十字架上の死に至るまで従順であられ、このため御父によって称揚され全宇宙の主として立てられたからです。従って、信徒がキリストの王職に与るのは、自己と戦い罪の王国に打ち勝つ犠牲によって、また、あらゆるところに福音の精神を広めて、真理と正義と平和の王国を建設すべく働くことにおいてであります。信徒は造られた世界の価値をよく知っていますから、真の世俗的活動によってもふたたび万事をその真の目的に向かわせることができます。こうして、世界が「正義と愛と平和のうち」にその目的(『教会憲章』36)に達するわけです。

3 信徒の召命と使命を絶えず発展させる秘訣は、キリストの三つの職との関係に見出されます。キリストこそ力と光の尽きることはない源です。教会のすべての子供たちが以上の確信を強めることができるよう、御告げの祈りを通して聖母マリアの仲介をお願いしましょう。(二・三・一)

共通司祭職と位階的司祭職

本日思い出していただきたいのは、信徒の共通の司祭職そのもの、及び神の民における共通の司祭職と、職位的・位階的(ヒエラルキー的)司祭職との関係です。

1 共通司祭職は洗礼の秘跡に基づき置きます。全てのキリスト信者は真にして固有の意味で司祭であります。この点は啓示を見れば明らかです。第二バチカン公会議は聖書の教えを再確認し、様々な事情に限り追いやられていた面を前方に

押し出しました。「洗礼を受けた者は、再生と聖霊の塗油によって、霊的な家および聖なる司祭職となるよう聖別される。それはかれらがキリスト信者のあらゆるわざを通して霊的供え物をささげ、やみから御自分の感嘆すべき光へとかれら自身だ御者の力を告げる者となるためである。」(『教会憲章』10)

公会議は啓示に基づいて共通司祭職の共同体的な面を強調しています。事実、共通の司祭職という考え方のものも、これについての聖書の教え全ても、共同体性を強調しているのです。「選ばれた民族、王の司祭職、聖なる民」(ペトロ①2・9)を構成する者は、自己の「すぐれた行ない」と「善業」(同上)によって、異教徒や神から離れた者が神に光栄を帰するよう導きます。(共通)司祭職をこのように考えると、使徒職の方法が導きだされます。すなわち、個人的な証言を前提とするが、個人レベルを越えて共同体的な面を強調する使徒職の方法のことです。

2 共通司祭職の尊厳には責任が伴います。キリスト信者は人と共に営む社会生活の複雑な状況に対処する義務を負っているのです。とは言っても、信者が見捨てられているといっわけではありません。主が叙階の秘跡を制定なさったのは、キリストが創設された教会の牧者、つまり使徒たちの役目を継続させるためでした。これが職位的司祭職です。そのために、神御自身が神の民の中から選び、お呼びになった信者の一人ひとり聖なる権能を付与され、キリストの代理者として聖体の

名において神にささげる」のです。(『教会憲章』10)

この点について公会議の教えは明快そのものです。「信者の共通司祭職と職位的または位階的司祭職とは、段階においてだけでなく、本質において異なるものであるが、相互に秩序づけられていて、それぞれ独自の方法で、キリストの唯一の司祭職に参与している。」(同上)

教理面、実践面を問わず、司祭職の本来の一体性、すなわちキリストの司祭職へ参与するという点および職位的司祭職と共通司祭職との間には本質的相違があるという点、——以上二つの点を正確に評価しなければ、司牧がほんとうの意味で発展するのに必要とされるより高次の調和が保証されなくなってしまう。

聖マリア、全司祭的民の御母マリアよ、全ての信者が各自の聖なる召命と使命に忠実であるようお助けください。(一九八七・三・八)

回勅『贖い主の母』より抄訳

マリアは、人の子の(育て親)であるだけでなく、救い主・贖い主の御業に(特別な方法で協力)なさった。

マリアは十字架へ向かう信仰の旅路を辿りつつ自らの行ないと苦しみを救い主の全使命に母として協力された。御子の業に協力するにつれてマリアの母性は独特の変貌を遂げ、キリストの使命の対象となる人々に対し以前にも増して(燃える愛)を抱き、人々の超自然的生命を回復させたのである。

不変の教え

聖母の被昇天

「太陽に包まれた婦人」(黙示録12・1)。教会は来たるべき将来に思いを馳せます。太陽を身にまとった婦人、聖母マリアの被昇天は、来たるべき将来のかたどりで、被昇天こそ、神の似姿として造られた人間、十字架につけられたキリストによって贖われた人間の、最終目的地を示しています。キリストの御復活と御昇天以後、神の民全員が「栄光へと呼ばれる」ようになりました。

未来に目を向けて

教会は聖母の被昇天を道しるべに、遠い過去からさかのぼり、未来に向けて思いをめぐらせます。

ヨハネ黙示録の「太陽をまとった婦人」とは、人祖の墮落の後、闇の力との戦いの中心人物となる婦人のことでもあります。

創世の書がその辺の事情を語っています。神ヤウエは蛇に仰せになりました。「おまえと女との間に、敵意を置く」(創世3・15)と。黙示録も同じ意味のことを述べています。

「竜は出産しようとする婦人の前に立ち、産むのを待ってその子を食おうと構えた」(黙示録12・4)。人間の歴史が始まって以来、地上で続いている戦い(『現代世界憲章』13参照)の主眼となるのがこれなのです。創世の書の「蛇」、黙示録の言う「竜」、いずれも同じ闇の力、あらゆる偽りの王、神を拒否した「否認」の化身です。

この世と人間の歴史は、サタンからの絶えざる圧迫を受けながら発展してきました。世の始めにサタンは神に背を向けた、つまり、造られたものが創造主を否認なのです。人祖を誘惑した時から、サタンは人祖の後に続く代々の子孫の心に「われ仕えず」というサタンの標語を植えつけようとする悪魔になっています。

ヤウエのしもべ

「婦人とは誰のことでしょうか。自らの全存在をかけて心から「私は主のはしのためです」(ルカ1・38)と答えた人のことです。

このように言うことができたのは、彼女が母の胎内に宿った時から、預言者の告げた「ヤウエのしもべ」、すなわち「神よ、私は御身の聖旨を果たすために来ました」と仰せになった御方の恩寵に満ちていたからです。

その御方は、御父の永遠の子です。神に背く霊と、救いのために働く者たちがあいつ争う渦中で、神の御子はマリアの子となられたのです。「婦人は男の子を生んだ。この子はすべての異邦人を鉄のつえで牧するはずの者、」(黙示録12・5)と詩篇は歌っています。

こうして創世の書に見える神の御約束は実現しました。人間の歴史のただ中に世界と人類を救う者、婦人の子」が姿を現わされたのです。全て造られたもの、すなわち人類とこの世界の救いをめざす神の永遠の御計画と、人間とこの世界のあらゆるものが神に反逆することを望むサタンの思惑との戦い、対立関係が進展しているのです。

私たちがこの一大抗争に無縁ではありません。人類の歴史の一コマ一コマにこの対立が姿を見せますが、あらゆる人間の心の中にもこの対立は刻みつけられているからです。先の公会議は、そこかしこでこの点に言及しています。

十字架の実

教会は、聖母被昇天の祭日のうちに、地上に人間があらわれて以来の全歴史が含まれていると教えます。

現代人は、神に関係のあるもの全てを否定してしまいたいという強烈な誘惑に襲われているようです。偽りの霊のたぶらかしにあって人々は自ら「神のごときもの」ゆえ、善悪を超越した存在である、「善と悪を知っている」(創世の書3・5)

罪など存在しない、と信じています。ところが実際には罪も悪も存在しているわけで、それは以前にもまして、人間を陥れ、思いも及ばぬ広がりを見せる脅威となっています。ここで教会は、大いなる印、一度も偽りの霊に屈したことのないあの「婦人」に目を向けます。他ならぬこの婦人、ナザレトでもベトレヘムでも、十字架の下でも、天にあげられる時も、つねに主のはしのためであった婦人こそは、真理の霊に動かされて、母としての力でこの偽りに満ちた今の時代を導く御方なのです。私たちにあって、真理の霊とは、キリストの十字架と復活の実りなのです。

第一の模範

「うして教会は、「婦人」すなわち聖母マリアを注視します。

マリアこそは、教会がまず範とするべきお手本なのです。マリアは自らを余さず贖い主に捧げるため、処女であることを望みましたが、さらに母となることを望みました。彼女自身が「人の子」としての生命を与えた神の独り子において、子供たちに生命を与えるために。

歴史が始まって以来、人間は神に逆らう者たちの奸計に脅やかされ続けてきましたが、それに終止符をうつべく、贖いの力が到来しました。そこではマリアの母としての働きが大きな役割を果たしました。「神とその玉座のもとに上げられ」(黙示録12・5)たマリアの子は、人類とこの世の救いに関する神の御計画、つまり創造についての御計画を新たに

してくださったのです。最初に救われたのが、救い主の御母でした。本日、教会は信仰の目を鋭くして、婦人を養うために神が備えられた場所」を見定めたいと思っています。

マリアの被昇天によって神による世界と人類の救済計画が再確認されました。ヨハネ黙示録が証言するように、これは天国においても確認済みです。「神の救いと力と国とそのキリストの権威はすでに来た」(黙示録12・10)と。

聖母の被昇天を思いつつ、再び教会はキリストの秘義全体について、歴史の始めから終わりまでを黙想します。過去と現在とを、その秘義の観点から眺めてみるのです。

こうして未来が開けてきます。世界と人間の歴史、さらに教会の最終的なカタチが見えてくるのです。「未来」という目のくらむような輝きのもと、教会は過去と現在を黙想します。ご覧なさい、天では神の神殿が開け、その中に契約の櫃が見え……壮大なるしが天に現われた」(黙示録11・19、12・1)

これは何のしるしでしょうか? 「太陽に包まれた婦人」があり、その足の下に月があり、頭に十二の星の冠をいただいていた。(同12・1) この婦人こそ、生ける神、父と子と聖霊の内にある世界と人類の未来に他なりません。それは「われらの神の王国、キリストの権威」です。

マリアは、神への反逆を打ち負かす神の救いです。被昇天という秘義のなかでマリアは輝かしい未来の印なのです。(八四・八・二十七)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月 十日発行 ■定価 一部七十円送料四十円 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393